陶説

日本陶磁協会発行

没後50年・大回顧　板谷波山展

731　二月号

昭和三十一年三月九日
平成二十六年一月二十五日印刷
平成二十六年二月一日発行

陶説二月号（毎月一回一日発行）

通巻第七三一号　定価千三百円

TOSETSU

A Monthly Journal
Published by
The Japan
Ceramic Society

青花人物文長頸瓶　明末・17世紀前期　高37.0cm（各）

東洋古美術

繭山龍泉堂

〒104-0031　東京都中央区京橋2丁目5番9号
Tel 03(3561)5146　Fax 03(3561)6716
E-mail：mayuyama@big. or. jp
http：//www. mayuyama. jp/

ISSN　0563 9522

陶説 平成26年2月 第731号 目次

表紙　板谷波山「彩磁月桂樹撫子文花瓶」 大正２年（1913） 出光美術館蔵

原色・単色　出光美術館「没後50年・大回顧　板谷波山の夢みたもの―〈至福〉の近代日本陶芸」展より

単色　サントリー美術館「IMARI／伊万里―ヨーロッパの宮殿を飾った日本磁器」より

開かれた波山研究を目指すために ……荒　川　正　明（11）
板谷波山の作品に見る有識故実意匠 ……田　中　　潤（16）
出光美術館「没後50年・大回顧　板谷波山の夢みたもの―〈至福〉の近代日本陶芸」展に寄せて ……柏　木　麻　里（21）
波山は何を見てきたか　補遺―「没後50年 板谷波山展」、その後 ……花　井　久　穂（32）
サントリー美術館「IMARI／伊万里―ヨーロッパの宮殿を飾った日本磁器」に寄せて ……安河内　幸　絵（40）
東京国立博物館「特集陳列　人間国宝の現在」作家インタビューより
⑥鈴木　藏 ……横　山　　梓（47）
⑦伊藤赤水 ……伊　藤　嘉　章（49）
⑧伊勢崎淳 ……伊　藤　嘉　章（51）
⑨加藤孝造 ……横　山　　梓（54）
追悼　劉新園先生 ……弓　場　紀　知（56）
古田織部の伝記史料（２）織部の妻と妹 ……佐　藤　節　夫（58）

肥前における三島手の変遷―窯跡出土資料を中心として―（10） ……東中川　忠　美（60）
考古学から見た名物瀬戸茶入（６） ……井　上　喜久男（64）

関西の陶芸展 ……小吹隆文・梅田　稔・澤田美恵子・森　孝一（69）
東海の陶芸展 ……井　上　隆　生（79）
関東の陶芸展 ……外舘和子・花里麻理・唐澤昌宏・森　孝一（86）
第451回　東茶会拝見記 ……（94）
新刊紹介「FIRED EARTH, WOVEN BAMBOO Contemporary Japanese Ceramics and Bamboo Art」 ……小　野　公　久（93）
表紙図版解説 ……柏　木　麻　里（２）
口絵図版解説 ……柏　木　麻　里（28）
口絵図版解説 ……柏　木　麻　里（46）
美術館・博物館　展覧会＆特別行事案内 ……（102）
協会ニュース ……（109）
陶説点滴 ……編　集　同　人（115）
編集後記 ……（116）

表紙題字　安田靫彦／カット　藤平伸・加藤清之

大藝術家 北大路魯山人展
平成26年2月21日（金）～3月4日（火）
※2月27日（木）・3月2日（日）はお休みをいただきます。
会場　しぶや黒田陶苑
渋谷区渋谷1の16の14
メトロプラザ1F
03-3499-3225

しぶや黒田陶苑
魯卿あん

荒川豊蔵・加藤唐九郎・金重陶陽・川喜田半泥子・小山富士夫・棟方志功ほか
魯山人を巡る美の巨匠たち展
平成26年2月21日（金）～3月8日（土）
※2月23日（日）・3月2日（日）はお休みをいただきます。
会場　魯卿あん（京橋店）
中央区京橋2の9の9
ASビルディング1F
03-6228-7704

5 秋山陽「Metavoid 24」

形の粘土に何らかのカタチを与える為の確かな根拠を必要としていました。

そして、深い共感を覚えていた様々の造形…旧石器時代のヴィーナス像、アフリカ彫刻、ミケランジェロの奴隷、ブランクーシ、プライマリーストラクチャーズ、八木一夫…脳裏に去来するそれらの残像を手掛かりに、思いつくままにカタチにすることによって、私自身の根拠を見つけようとしていました。

▶6 秋山陽「Metavoid 22」

当時、私には陶であることの必然と云う重い課題に踏み込む余力はありませんでした。従ってその後、主体的に陶を選択するに至る過程において、それまでの制作を根底から見直すことになり、作風も大きく変貌していきました。

しかし、顧みると、この時期に芽生えたカタチへの意識が後の制作の下地になったことは疑いようもありません。

▶7 秋山陽「Metavoid 25」

そして、未熟なまま生まれた当時の作品にもう一度スポットを当て、現在の視点で暖め直すことは無益ではないと思うのです。未開拓の荒野は自身の足元にもあるはずですから…」。

いまだ意志と選択の堅固な一致を見ない往時をいとおしむように振り返っている。

さてその作を数点ご紹介すると…、〝抱卵のかたち〟というくくりのもとに、それぞれ個別に題が付してある。「双子座」(写真1)。「壁体」(写真2)。「弧」(写真3)。「仮面としての椅子」(写真4)などである。土は赤合わせのブレンドで、九百度で焼成。燻しには松葉を使う。焼成後、丹念に磨くという作業がある。筆者は作品を前にして、欲しいか欲しくないかと自らに問うてみる。それをわが管見の最終的なよすがとしている。結局なんだかんだと解釈に解釈をかさねようと、ためつすがめつしようが、そして作品に盛り込まれるものが美であれ毒であれ、思想であれメッセージであれ、要は見るという行為の始めにおいて、勃然たるものを見物側に生起させるかどうかがすべてなのではないか。そしてそれが欲しいともなれば、それはいわ

ば負けたということになるのである。いつもながら写真ではもどかしいが、挙げた四点の作がそうである。しかしながら、オリジナルにも付けていた?個別の題は、いわずもがなという思いを禁じ得なかった。〝抱卵のかたち〟だけですでに言い得ているのではないかと。原則的に秋山の作には言葉は不要だと思われるからである。秋山の作は不立文字のように屹立していると思うからである。

同じ伝で〝Metavoid〟からあえて選んでみれば…、「Metavoid 24」(写真5)。「Metavoid 22」(写真6)。「Metavoid 25」(写真7)といったところ。Void というのは、空、無、中空、あるいは取り巻く外的空間という意味もあり、それを Meta する、要するに形而上的に表現してみるといった意味なのではないか。まちがっているかもしれないが、こちらのタイトルはかっこいいし、すぐれて抽象的かつ深遠なものがある。作品は相変わらず、筆者のなかにある陶芸あるいはやきものという言葉が吹き飛ばされそうになる。しかしこれらは陶のみがなし得る造形でもあり、この人のスケールの大きさを感じさせるところなのである。

今回の七〇年代をルックバックしての作品群は、新鮮だった。それは四十年近いときを隔てての推敲のような作業だったのだろう。作者にとっても自己確認、あらたな自己規定を試みるといった意味で得るところがあったのではないか。それがこれからの制作にどのようなモメントとして働くか、刮目して見てみたい。

もう一つ思ったことは、今回の制作は師である八木一夫のひそみに倣ったのではないかということだった。八木も亡くなる直前に、過去の代表作を黒陶でまったくちがう様子に翻案している。師と秋山の年齢も符合する。たしか還暦だろう。しかしながら、それはそれとして、要は上述のごとく作品がものをいっていればそれでオーライなのである。筆者としては、今展で秋山は師恩に応えるとともに、師に挑戦するような気持ちでやったのではないかと思ったことであった。もしそうならばその気概やよしとしたい。

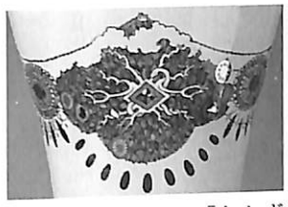
(梅田稔・京都後援会会長)

◇高柳むつみ展

(ギャラリー器館 京都市北区 平成25年12月7日~28日)

「あかずの壺 くり返す世界、しかしイコールではない」(呉須赤白金彩閉蓋長壺、写真1)の前で震撼した。それは五十センチ程の壺。呉須と赤絵で描かれた細かな文様、繊細な白もりと極細の毛彫りで、森羅万象が描かれている。壺であるが、蓋は開かない。これは用のものであることを拒否しているオブジェだ。

高柳むつみ展の会場で、この世ではない世界に迷い込んでしまった気がした。あれは、確か首里の深い森で見上げた空、闇がせまるなか、紺碧が一層に深まった空に不思議な閃光をみた。あわててシャッターをきった。確かに撮れていた映像だったのに、後で確かめてみたら、ただの闇だった。その紺碧の闇と光が、白磁の器「骨風」(呉須金彩酒呑、写真2)のなかにあった。



▲▶1 高柳むつみ「あかずの壺 くり返す世界、しかしイコールではない(呉須赤白金彩閉蓋長壺)」、(左)部分アップ

琉球には「洗骨」という儀式がある。死者を風葬し、朽ちて白骨化した後に、海水や酒などで洗い美しい骨にして、埋葬するのだ。今でも離島のどこかで秘かに行われているかもしれない。もし洗骨されるとしたら、私の骨は「風筒」(赤絵白金彩蓋付瓶、写真3)に容れてもらいたいとさえ思った。この「風筒」の蓋は開けることができる。蓋のところに白い繊細な組紐が通っている。蓋と口との相性がよく、互いが求め合うように結ばれる。透き通った白い肌に赤絵と白モリの細い描線が描かれる。フォルムは健やかな女体の曲線を描く。その中は冷たい肌の白磁の世界、音のない神の空間、永遠の静謐な安らかさがある。彼女が描いた世界は、生と死、陰と陽、対極にある概念でありながら、互いを必要とし、片方だけでは成り立たない世界を静かに受け止めていた。あるいは、一つの生命体が生き、孕み、老い、やがて死を迎え、風化し、骨となり、他の生命体の養分となり、また異なる生命体に命が宿る。そういった生きとし生けるものの輪廻を静かに受け止め、自らの生の時間の後、朽ちていく過程をも受けいれ、その先の静かで美しい世界を、磁器でしか描けない冷たい白い肌がもつ安らぎに似た静けさで表現していた。

▶2 高柳むつみ「骨風(呉須金彩酒呑)」

▶3 高柳むつみ「風筒(赤絵白金彩蓋付瓶)」

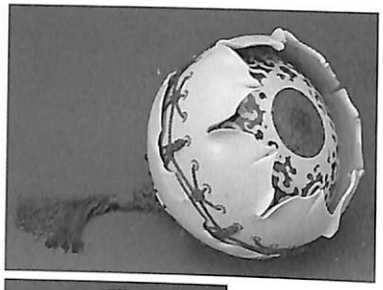
彼女の作品の技術の高さは、ピアノでいえばリストの超絶技巧といっても過言ではないだろう。その轆轤の技や絵付けの繊細さは、熟練の職人も驚くにちがいない。しかし彼女の素晴らしさはそれが、どこかで見た工芸展のように、これ見よがしで、あざとくないところである。技の繊細さに、祈りにも似た尊さ、清らかさを感じる。

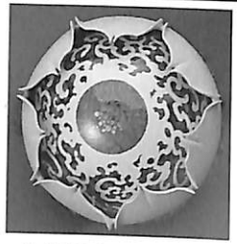
「無限光年の目」(呉須色絵白金彩、写真4)は、直径三十センチもある大きな目のオブジェ。深海に住む大王イカの生態から思い至った作という。瞳は呉須の青で細かに描かれ虹彩はプラチナ彩。目のなかに映る何千もの生命体があった。白もりで葉脈が書き込まれ、僅かな九谷青の薄緑が映える花萼(かがく)を象ったような形の薄い白磁で瞳は守られている。その全てに血を通わすため、赤い組紐で荘厳されていた。その目は、人間にはどうして見えぬのかと怒っているようでもある。

自然の力がとても強い森や、島を歩いていると、世界は見えざる神と無数の玉響(たまゆら)と自分しかいないような感覚になり、存在が危うくなる。そんな世界に迷い込んだと高柳むつみ展で感じた。それは、若い巫女だけに許された神が宿る特別な時間ではないかとも不安になるほどに。

一九八五年生まれ、二〇一〇年京都市立芸術大学大学院修了、現在富山県八尾町にて制作。

(澤田美恵子・京都工芸繊維大学大学院教授)





4 高柳むつみ「無限光年の目(呉須色絵白金彩)」、(下)正面

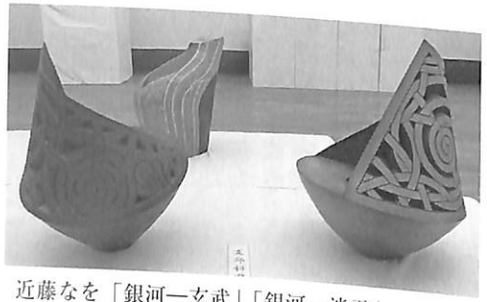
◇第四十七回公募展 女流陶芸

(京都市美術館 平成25年11月21日~27日)

今展には、会員四十九名が九十七点の作品を出品。また一般応募者九十二名のうち六十三名が入選し、七十点の作品が並んだ。今回、初めて女流陶芸展の審査に参加して驚いたのは、六十代の活躍が目立ったことである。受賞者では、近藤なをさん、北垣信江さん、田中芳子さんが六十代。女流陶芸には才能ある作家が大勢いるが、その中でも群を抜いている。まさに、女流陶芸恐るべしである。それでは、第四十七回展の受賞者と受賞作品をご紹介しよう。

【文部科学大臣賞】

近藤なをさん(東京都)は、二〇一一年第四十五回女流陶芸展にて京都市長賞を受賞し、一三年に女流陶芸会員となられた。五十半ばを過ぎて、一〇年に京都造形芸術大学芸術学部美術科陶芸コースを卒業するという努力家である。第四十六回展では「風の精霊」が入選を果たしている。今回の受賞作「銀河―玄武」と「銀河―淡雪」は、イメー



近藤なを「銀河―玄武」「銀河―淡雪」